若越郷土研究　五十七巻二号

福井市指定文化財

毛利家長屋門について

国京克巳

一、はじめに

福井市小野町の国道四一六号線沿いにある毛利家長屋門は、文化九年（一八一二）に武家屋敷から移築されたものと思われる堅牢な門構えの長屋門であり、近世末期から明治にかけての福井市の歴史を物語る建物であると同時に、本物件が所在する鶉地区の歴史を知る上で重要な建物であるとして、平成十八年に福井市文化財に指定された。[1] 小生は文化財指定以前の平成十五年に『福井市の歴史がみえる建造物』で、[2] 外観調査と地誌調査からこの建物は武家屋敷から移築されたもので、外観が柿葺あるいは木賊葺の建物と推定していた。しかし、文化財指定理由書には、その痕跡調査から屋根は藁葺であった可能性が新たに指摘された。またこの指定調査書には、移築に関しても、毛利長仁家文書から毛利家当主の平吉が購入し、文化九年に現在地に移築したものとあるとし、長屋門の謎がさらに解明された。この古文書とは「文化九年申二月ゟ　門普請見舞留帳　毛利性」（以下「見舞留帳」）と、「文化九年申二月吉日　志願日記帳　吉精」（以下「志願日記帳」）の二冊を指すものとみられる。[3] 今回この文書を調査し、合わせて長屋門を現地調査する機会を得た。本稿はこの調査に基づき、長屋門の普請実態を明らかにし、長屋門が文化九年に現地で新築されたものであることを明らかにするものである。

二、毛利家

毛利家は江戸時代坂井郡小野村に住み、木下村・小幡村・為寄村・石畠村など三十ヶ村余の福井藩大庄屋（組頭）を勤めた家で、通称吉兵衛・吉左衛門・平吉などと称し、幕末期に苗字帯刀を許されている。小野村は丹生山地の北麓に位置し、村高二三五石余であった。[4]「志願日記帳」にある吉精が苗字帯刀を許されたかは分からないが、文政十一年（一八二八）に吉郎の帯刀が許されて以降、卯（宇）兵衛・平之進が許されている。[5]「志願日記帳」にある吉精は後述に示すように毛利平吉のことである。

三、現在の長屋門

長屋門は正面七間（十五・六〇メートル）側面二間（三・八五メートル）の入母屋造桟瓦葺の建物で、中央二間（四・五七メートル）に入口通路を開く（図1～9）。入口扉は正面柱通りから約半間奥に鏡柱を立て、中央に両開きの主扉、両脇に片開きの潜戸（但し西側は嵌め殺し）を設ける。主扉の柱間は約八尺、脇間の柱間を約三尺五寸とする。入口通路の東側に板敷きの東物置、西側にコンクリート土間の西物置を設け、通路に面する部分と、背面の通路側にそれぞれの物置への出入口となる引違い板戸をたてる。正面入口の床を石敷き、扉を隔てた奥の通路を中央の床のみ石敷きとし、その他をコンクリート土間とする。また、通路上部は冠木に架かる桟梁上の天井板をそのまま床として物置とする。

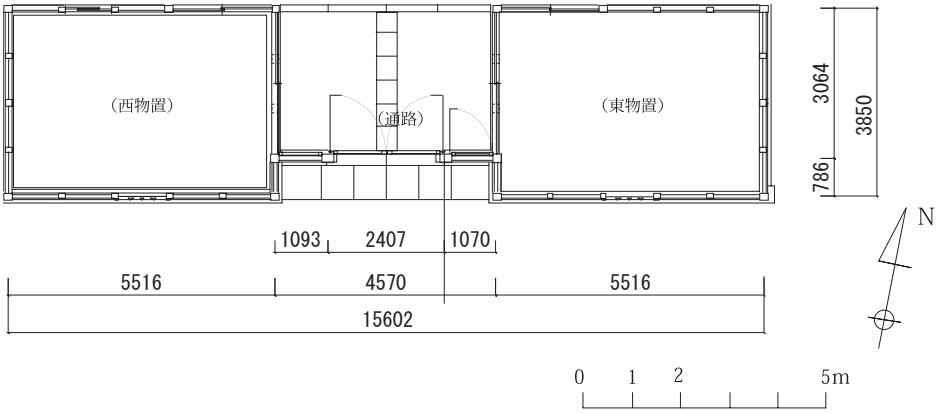

図１　長屋門平面図

東西の物置上部も低い位置に二階床を設けて物置とする。このため二階の物置は一室となるが、中央部の床が一段高くなる。

外壁は建物隅に柱を見せる中塗り仕上げの塗籠とし、腰に籔子下見板を張る。西面のみは単に下見張りとする。下見板は正面入口の左右見込み三尺と背面東側の外壁のみに当初の下見板がのこる。東西の外壁中央に太い上下枠を左右に伸ばした武者窓（竪連子窓）を設け、右手の腰下見板内に上下枠留の与力窓（横連子窓）を設ける。前者は一階の物置と二階物置の明かり取り窓、後者は一階の物置の明かり取り窓となる。背面は腰板をやや低く張り、その上を中塗り仕上げとし、西物置にのみ新しい小さなガラスの引違い窓を開く。屋根は四方を船枻造で持ち出して軒を受け、その四隅に柱から方杖を立てて、隅木を受ける。この方杖は部材が新しく、後世に補強（洋釘止め）のため入れられたものである。軒裏は吹寄せの棹を入れ、板張りとする。棹や天井板にはわずかに弁柄塗りの痕がのこる。屋根の桟瓦葺は銀鼠色の瓦で古いものではなく、棟に風化した棟石を置き、左手前の降り棟にも石を置く。屋根が瓦に葺き替えられた当初は降り棟もすべて石棟であったことがわかる。いづれの石も笏谷石ではなく、地元産の石のようである。

柱は正面のみ切石布石を二重に据え、その上に成の低い新しい土台を入れて立てられる。しかし、側面や背面の柱下には土台はなく、成の低い一重の布石のみである。鏡柱は一重の布石と土台を入れて立てられる。鏡柱の足元には蹴放し仕口痕らしきものがのこり、修理によって成の低い土台が入れられたことがわかる。挿入された土台の成は門の左右で異なり、東で七・六センチ、西で三・五センチである。このことから正面に入れられた土台は腐りあるいは地盤沈下の傾斜調整のため入れられたものと想像される。風化した通路の敷石は小砂利の混じる石で、基礎の布石ともに近在の石が使用されているとみられる。

小屋組は柱上に桁や梁を載せ、桁あるいは妻梁から内側へ半間のところに入れられた丸太の梁と、桁や梁に架け渡して跳ね出した腕木で軒先の出桁を受ける。ただし、通路・物

図３　長屋門外観（南東面）

図２　長屋門外観（正面）

図５　長屋門外観（背面）

図４　長屋門扉廻り詳細

図７　長屋門西物置

図６　長屋門東物置

図９　長屋門二階内部（通路上部）

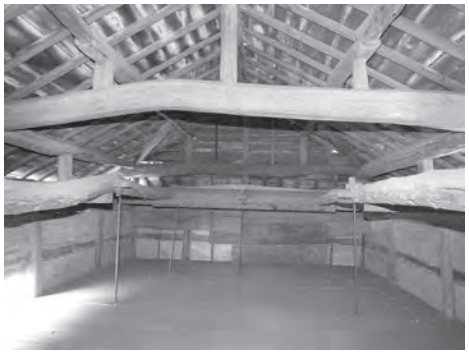

図８　長屋門二階内部（西物置上部）

置境では丸太を大きく太鼓落しした梁を小屋の外で腕木に加工した部材をもちい、妻梁寄りでは小屋内で丸太と腕木が繋がれている。母屋や棟木は桁と妻梁、通路と両物置境の梁上に立てた束で受けられる。通路上部は、棟中央に架けられた地棟に登梁を架けて小屋裏を広くする。なお、腕木より上部の丸太梁・小屋束・母屋・棟木・垂木・野地板は新しい部材である。

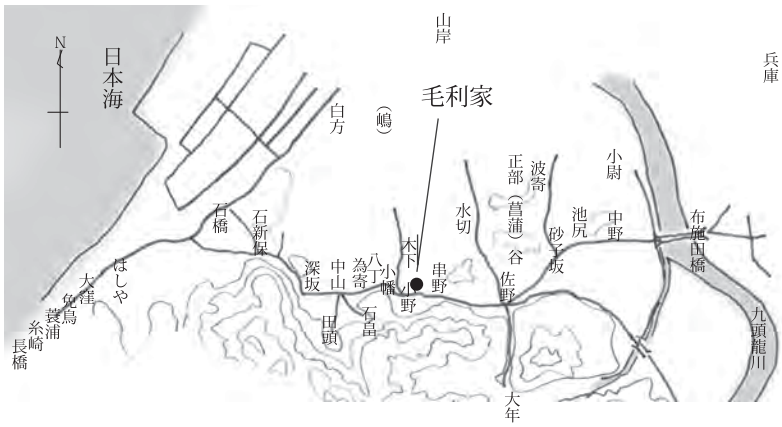

図10　毛利家の位置と見舞人の村

使用される木材の材種は正面の入口廻りの鏡柱・冠木・隅柱を欅材、それ以外の梁・桁・腕木・天井板などを松材、下見板の板と野物柱を杉材、土台を檜らしき材とする。なお、長屋門の左右には棟に瓦を置き、腰を板張りとする塀が取り付き、右側にのみ通常の出入口となる鉄板葺の棟門が開かれる。

四、長屋門普請文書

（一）「見舞留帳」

「見舞留帳」は文化九年長屋門建設の際に届けられた見舞品と見舞人の住所氏名が主に記された記録で、末尾に十二月二十五日から二十九日にかけての人足とその手間賃が書かれる。末尾の記録は文化九年の記録かどうかは分からないが、後述の「志願日記帳」から前年の十一月より長屋建設の準備がはじまり、九月にはほぼ終了しているので、前年の普請にともなう人足手間の控えと考えられる。普請見舞には地元の小野村や串野村をはじめ周辺の村々三十二ヶ村一〇九名（重複を一部含む）から見舞の品が届けられている。見舞人の住所を見ると（表1・図10）、北は現坂井市三国町山岸、東は同坂井町兵庫、南は現福井市大年町、西は同長橋町と広い範囲に及んでいる。元治二年（一八六五）の「支配下村々庄屋長百姓判鑑帳」[6]によれば、この見舞人は毛利家が幕末に福井藩大庄屋として支配した三十八ヶ村の住人が多くを占めている。長屋門建設時に毛利家の支配下であったかははっきりしないが、隣の串野村は九人、中野村が五人、佐野村・大年村各一人、支配外の遠く離れた兵庫村四人などがみえる。[7]中野村の中には特に大工と肩書される者や大工として工事に参加している者もみえ、串野村の中には木挽で工事に参加している者もみえる。毛利家のある小野村と遠く離れた兵庫村の勘左衛門は二回名前がみられ、見舞品の酒も一斗と他の見舞人より多い。勘左衛門は明治時代には兵庫村の旧家であったことから親戚か何かであろう。

表２　長屋門普請経過

月	日	内容
11	20	願い書提出
	25	評定の上許可
	26	お礼
12		
1		大工破風細工
2	6	木挽仕事開始
	13	寄合・組町下代内回り・願書提出（３通）
	14	お礼・下代へお礼（吉田・山石）
	15	願提出
	23	見分（吉田・山石）泊・同案内（村役）
	24	見分（吉田・山石）・見立（村役）
3	15	木造り開始？
		↑ 基礎工事？
4		↓
5	9	上棟？
	12	普請お礼（福井へ）
	14	寄合・泊見分（村役）
	15	泊見分（村役）・建て方完了？
	16	造作開始？
6	3	御礼
7	14	大工工事完了
	24	壁工事開始
8	20	叩き開始
9	1	壁仕上げ完了
	4	叩き完了

表１　「見舞留帳」の見舞人

		見舞人の村	1頁	2頁	3頁	4頁	5頁	6頁	小計	備考
1	※	**小野**	10	1	5	5			21	
2		**串野**	4	2	2	1			9	木挽あり
3	※	深坂	1					1	2	
4	※	木下	1	1	3	3	3		11	木挽あり
5	※	**中山**		1		1			2	
6	※？	八丁		2	1	2		1	6	現小幡？
7	※	**白方**		1			1	1	3	
8	※	山岸		1				1	2	
9	※	波寄		2			2	1	5	
10		兵庫		1		3			4	
11	※	**砂子坂**		1	1	1	2	2	7	
12		中野		1	2	2			5	大工あり
13		佐野		1					1	
14	※	石畠			1				1	
15		大年				1			1	
16	※	嶋				1	1		2	
17	※	**田ノ頭**				1			1	
18	※	**為寄**				1			1	
19	※	みの浦					1		1	
20	※	**水切**					3	1	4	
21	※	**小幡**					2	2	4	
22	※？	**糸崎中**					1		1	
23	※	石橋					1		1	浄光寺
24		小□□					3		3	
25	※	免鳥					1		1	
26	※？	はしや						1	1	現両橋屋？
27	※	石新保						1	1	願念寺
28		池尻						1	1	
29	※	糸崎						3	3	
30	※	**小尉**						1	1	
31	※	**正部谷**						2	2	
32	※	長橋						1	1	
		合計	16	15	15	22	21	20	109	

※印は大庄屋の管轄範囲（元治二年）　重複を含む　？は可能性を示す
太字村は庄屋を含む村　数字アンダーバーは庄屋との書き込み

一方、庄屋とあるものは十名のみで、その名はみられない。毛利家のある小野村や隣りの木下村・串野村・八丁の庄屋四名を加えても毛利家支配下の約四十ヶ村からみて決して多くない。小野村や串野村の庄屋や長百姓は「見舞留帳」には名のみで、「志願日記帳」にみられるような村役の肩書付きの名あるいは村役のみの表記とは異なる。このような表記をみると、名のない村の庄屋は役所の付き合いとみられるが、それ以外の名のみは個人的な関係が強く感じられる。以上から長屋門建設は福井藩大庄屋としての役所的な付き合いの見舞は少なく、血縁を含めた地縁あるいは普請の仕事上あるいは地主小作などの関係から見舞がなされたものと推測される。

見舞品には酒・赤飯・油揚げ・たけのこ・にしめや、ます・かれい・草たこ・鯛などの魚類、現金などがあり、特に酒や現金がその多くをしめている。魚類が多種類みられるのは、見舞人が日本海に近い村の住人であることによるものとみられる。なお、一般の民家普請の見舞でみられる屋根葺き材料の麻木・藁・縄が見舞品にみられないのは珍しいが、[8]

これは後述に指摘するように長屋門が役所建物としての普請によるものとみられる。

（二）「志願日記帳」

「志願日記帳」は、長屋門建設の際の材木明細（自分持ちと購入分）、建設の諸手続きにかかる費用、福井藩への建設許可手続き、長屋門の大きさや仕様、それに必要な材木をはじめとする材料、職人の出面・賃金などが記されたものである。長屋門建設の際の木材明細と建設前の諸手続きにかかる費用は、字が汚く、確認の印が付けられ、下書きであることがわかる。一方、福井藩への許可手続き控え以降の部分は清書された清帳であるが、最終的な金額合計はない。この清帳の最初に「家前長小屋門造建諸事覚　毛利家　平吉代　花押（花押の上部には小さく吉精）」とあり、以降が正式の書類であることを示している。下書き帳の材木明細は清帳の材木明細とほぼ一致するが、下書き帳にみられない明細が清帳にはあり、さらに職人の出面や建設資材が多数清帳にみられ、下書きは他にもあったものとみられる。

下書きの材木明細のうち毛利家自身の持ち山より調達した材木は、長さ・大きさ・数量・樹種・代金・尺当りの単価が記入される。特に樹種の記入のないものは清帳との比較から松で、この他に杉・槙（槙材については後で検討）が使用されている。下書きの材木明細の記述後半には代金の記入がなくなり、最後には品目のみで途中で終わっている。下書きの材木明細の購入分は持ち山分と同様な体裁で購入先も合わせて記載され、樹種は槙・栗・松・杉である。最後に石の代金と購入先も記される。下書きの材木明細の購入分は清帳の木材明細より項目が少ない。清帳の材木明細と下書きの材木明細の金額を比較すると、持ち山分・購入分の両方で、清帳の材木金額が高くなっているものが多くみられる。金額の上昇は約一割から四割まであり、その理由については後述する。

清帳には木材の他に石・石灰・瓦・鉄のほか、塗装に使用されたとみられる煤・くちなし・にんしゅ（弁柄？）・種油、屋根葺材料の茅・藁・竹・縄などの建築資材、大工・木挽・日雇・壁屋・石屋など職人の出身地・出面・支払額（大工は未記入）がみえる。

五、普請経過

藩への長屋門建築願の提出から工事完了までの大まかな工事工程を、「志願日記帳」の提出書類、手続きにかかる人足費用内訳、さらに職人の出面などから推定すると、表2のようになる。文化八年十一月二十日の門再建願の提出にはじまり、同二十五日の藩評定による許可、同二十六日のお礼勤めで同年は終わった。「見舞留帳」に年不詳の十二月二十五～二十九日の人足賃の記録があり、年末に長屋門建設に関係する諸事があったことが考えられる。翌年は正月から月末近くまで大工棟梁の善兵衛に出面があり、実質的な工事がはじまっていたことがわかる。木材明細の中に「門両はふ　代二十五匁　此分中野善兵衛冬之細工ニ渡方ニ買」とあり、このことを裏付けている。二月にはいると木挽による製材がはじまり、三月中旬から大工による木造りがはじまる。途中二月十三～十五日にかけて藩役人による見分用の願書の準備と提出が、当主と小野・串野の両庄屋・長百姓の手

伝によって進められ、二十三・二十四日に泊まりによる役人の見分が行なわれている。基礎工事の取り掛かりはみえないが、日雇人足の出面から三月下旬頃に行なわれたことが推測され、棟上げ祝儀の内訳と大工の出面から五月八日あるいは九日に上棟式が行なわれている。途中、四月下旬から五月上旬に日雇人足が集中するので、屋根の藁葺・壁の荒壁付け工事が想像される。上棟式の数日後の十二日に普請お礼に福井へ人足を遣り、藩役人へお礼金をしている。同十四日役所への手続きの手伝をした小野・串野の両庄屋・長百姓などとの寄合、同十五日泊り見分を行なっている。泊り見分の費用内訳をみると、イカ・さば・山いも・酒などが出されており、泊り見分とはお礼の酒宴とみられる。この日に多くの大工が仕事を終えているので、長屋門建設にかかる主要部分の工事が完了したものとみられる。六月三日にも礼金が支出されているが、これは全くわからない。以後大工棟梁が七月十四日までの三十日弱、手伝大工一人がその間の十一日余仕事をしている。これは長屋門両脇の袖塀の建設とみられ、この十四日をもって大工工事は終了した。同二十四日からは左官職人によって壁仕上げが九月一日まで、八月二十日から九月四日までは長屋門の通路叩きがなされ、最終的に工事が完了したとみられる。工事期間は約九ヶ月程であった。

六、職人と出身地

「志願日記帳」から職人の氏名・出身地・出面を表3に示す。まず、大工として働いたとみられる木挽を含めると大工は十五名、その出身地は中野六名、黒丸三名、串野村・木下村・上野村・金津・三国・大味村各一名である。大工の一番多い中野村は小野村の北東二キロメートルにある村（現福井市西中野町）で、石高二〇八石余（内田一八二石余）明治六年戸数十一、周囲を砂子坂村・池尻・黒丸村に囲まれる。[9] 大工棟梁は作業の出面や上棟の祝儀金額からこの村の善兵衛、副棟梁は幸助であることがわかる。安永六年の松平主馬家の長屋普請では中野村大工儀兵衛がかかわり、同七年の台所普請入札に地方大工として儀兵衛の他、深坂村猪兵衛、同喜右衛門、高須村吉右衛門が参加し、儀兵衛が落札している記録がみえる。[10] このことから江戸時代後期に中野村は大工村として栄えていたことが考えられる村である。黒丸村は中野村の北東に隣接する村で、石高二四二石余（内田二二八石余）安政三年戸数二十五である。[11] 串野村・木下村は小野村の隣村、上野村は東一キロメートルにある村である。ここで注目されることは、同じ坂井郡でも北に位置する宿場町金津の与右衛門・大味村の七蔵・湊町三国の清蔵の三名が参加していることである。金津の与右衛門は副棟梁幸助に次いで早い時期の三月下旬から木造り作業に参加し、棟梁に次いで作業日数が多い。七蔵は与右衛門と同時に普請作業に加わったが、三日で去り、清蔵は木造り最盛期の四月中旬から参加している。このことから与右衛門は棟梁に近い技量をもった大工で、善兵衛と子弟関係など何らかの深い縁があって、参加したことが想像される。大味の七蔵は金津の与右衛門とは地理的に近く、与右衛門と同日の三日間のみの参加であることから、与右衛門との関係から参加したと想像される。三国の清蔵は木造り最盛期からの参加で、中野村あるいは周

表３　職人の出面一覧

職種	村名	氏名	前年～1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	合計	備考
大工	中野	**善兵衛**	25									110.5	5/16～7/2 18人、7/3～14 11.5人
	〃	**幸助**										34	
	〃	**孫左衛門**										22.5	
	〃	**長太夫**										39	
	黒丸	**銀次郎**										29.5	7/3～14 11.5人
	上野	**茂右衛門**										26	
	金津	**与右衛門**										44.5	
	大味	七蔵										3	
	三国	**清蔵**										28.5	
	中野	**善蔵**										2	
（木挽）	黒丸	磯右衛門										2	
（木挽）	木下	**与三兵衛**										5	
	黒丸	寅松										3	
	中野	巳之助										3	
	串野	多助										19	
木挽	木下	甚兵衛										14	
	〃	又右衛門										10	
	〃	善左衛門										5	
	串野	伝兵衛										14	
	小野	又右衛門										4	
壁	福井	安右衛門										28	
石屋	石新保	吉右衛門										8	手間
桶屋	八町	半兵衛										4	手間
叩き	水切	安右衛門										7.5	
日雇	小野	多兵衛										10.5	
	〃	惣右衛門										15	
	〃	利兵衛										6.5	
	〃	理右衛門										4	
	〃	嘉兵衛										3.5	
	〃	佐兵衛										1	
	〃	半兵衛										3	
	〃	甚作										3	
	〃	五郎左衛門										0.5	
	□田□	六三郎										2	
	小野	半右衛門										5	
建舞日雇		請負15人										84	日雇の最長日数7.5人
合　計												493.5	

※ 太文字は上棟参加者
※ 中野村は現西中野町

辺の大工と同じく応援の大工であろう。

一方木挽をみると、木下村が三人、串野村一人、小野村の一人である。出面日数の多い木下村の甚兵衛が中心となって毛利家持山の材木を製材したのであろう。「志願日記帳」には毛利家は長屋門普請のため製材した材木も買っている。この材木の購入先は大工棟梁の善兵衛、木挽の甚兵衛・伝兵衛・又右衛門、この他に小幡村の伝太夫、串野村の善太夫である。大工として参加した木挽与三兵衛も木下村出身であり、木下村を中心とする串野村・小幡村は木挽の多く住む地域であったことがわかる。

この他の職人をみると、石屋が上野村利左衛門、叩きが水切村安右衛門、左官が福井の安右衛門、建具が福井神明町の文右衛門となっている。日雇い人足は地元小野村を中心とする十一人が参加している。なお、石新保村石屋の吉右衛門や八丁村桶屋の半兵衛は屋号に石屋あるいは桶谷とあるが、壁方の手間として記入されている。半兵衛の手間賃は一日一人一匁三分で日雇いの一匁四分と同程度で、手伝いの人足と考えられる。しかし、石屋吉右衛門は一日一人二匁五分で、かべ屋安右衛門や木挽の一匁八分よりはるかに高く、後述の大工想定賃金の二匁五分と同じである。このことから石屋吉右衛門は壁方に記入されるが石工で、桶屋半兵衛を手伝いに手間請け仕事である塀の控え石設置をしたことが考えられる。以上のように長屋門普請は小野村近在の職人によってほとんどの工事がおこなわれたことがわかる。

七、工事費

「志願日記帳」から長屋門建設にかかる費用を書き出したものが表4である。材料代や職人などの手間賃さらに諸費用が記入されるが、大工は工数のみで金額の記入がない。そこで文化六年の鯖江藩領八石村での普請記録による大工手間一人一日二・五匁を参考に、大工金額を算定した[12]。これによると、建設費用は総額約三九八一匁となり、職人手間代が約一三三二匁で三三・五％、材料費が約二〇二五匁で五〇・九％、手続き関係が約六二六匁で十五・七％となる。意外に役人へのお礼、書類の申請あるいは見分などの人足賃、飲食をともなう宿賃に費用を多く要したことが分かる。詳しくみると、職人では大工が全体の約二三・二％を占め、日雇・木挽・壁屋とつづくが微々たるものである。一方、材料ではやはり材木が約二七・三％を占め、つづいて茅や藁などの屋根葺材の八・一％、それに次いで石や瓦などの特殊品がつづく。

長屋門建設の資材は前述のように材木が毛利家の持山より用立てられている他、屋根葺き材の藁・麻木・竹・縄も毛利家のものが使用されている。その不足分の材木や屋根葺き材は近在の小野村・木下村・串野村・佐野村・中野村の者より購入している。また、鉄釘類は八丁村、基礎石や両脇塀の基礎石と棟石は上野村石屋、材木の色付けに使用する種油や煤も近在の村より購入している。しかし、塀の瓦が清王村（現あわら市）、瓦緊結用の針金や杉戸が福井、門通路の土間叩きの石灰も他所で購入され、近在で調達できなかったようである。ちなみに文化三年建立の石新保町の願念寺本堂や同六年頃建立の石橋町の浄光寺本堂の瓦はいずれも清王村近くの滝村で生産されており、この頃にはこの地域は瓦生産

表４　工事費内訳

内訳		項目	単位　匁											小計	合計	備考（購入先など）	買木・持山挽物分の金額
工賃・その他		日雇（14匁／人日、1匁／人日）	14.7	21	9.6	5.6	4.9	6.4	4.2	4.2	0.7	2.8	5	79.1	1331.6		
		建前日雇（1.3匁／人日）請負	109.2											109.2			
		叩き（2匁／人日）	15											15			
		壁（18匁／人日）	50.4											50.4			
		石屋（25匁／人日）	20											20			
		桶屋（13匁／人日）	5.2											5.2			
		木挽(18匁／人日、1.6匁／人日)	25.2	18	9	16.2	15.3							83.7			
		大工(329+41人）(25匁／人日)	925											925		大工手間賃は文化6年の貰輪家住宅の増築文書によった（現越前市八石）	
		上棟大工祝儀（15、5、3）	44											44			
材料	木材	植柱（6寸8本、6寸8寸4本）	72	42										114	1085.5	大工善兵衛より買上	(64+39+？)中野善兵衛,佐野孫六
		松上角（6寸13尺、4寸6寸、15寸4寸、12寸75寸）			45	36	14.4	4	15.4					114.8		木下甚兵衛、小幡伝太夫より買上	(40+27+9.6+28+11)木下甚兵衛,小幡伝太夫
		杉板類			12	9.4	12	20	17	10				80.4		小幡伝太夫より買上	(9+9+8+16+13.6)
		杉垂木、小舞	7.5	1.2	2.2	0.6								11.5		串野伝兵衛より買上	
		栗（3寸、4寸角）	12	7.2										19.2		煙□市郎右衛門より買上	(12+7.2)
		門はふ板	25											25		小幡伝太夫（善兵衛の冬雇工）を買	
		松（6寸上角、6寸上角、6寸角、4寸6寸上角、4寸5寸上角、3寸5寸上角）	60	10	19	28	52	10	27	15				221			48+15+14+18+40+8.4+24+15
		3寸5寸、25寸3寸、3寸角、？7寸上角	28	6	19.2	9	65							127.2			16+6+19.2+9+60
		丸太(松25間丸本6本末口45寸,3間丸本2本末口45寸,13尺丸本24本末口35寸)						6	4	19.2				29.2			
		杉柱（28本、下見桟）	28	5										33			
		檜木（7寸12寸上角、6寸8寸、6寸上角）	120	3	20									143			120+18+？+5(4尺2丁かふき)
		松板(6分、8分、	61.25	8.4	6	2.7	11.7							90.05		小幡伝太夫, 串野伝兵衛、石橋木挽、串野善太夫、三国木屋より買	61.25
		杉板（4分）	37.8	6.3										44.1		福井神明町正治屋文右衛門より	
		杉板（4分）	12											12		中野善兵衛より買上	
		杉板（4分）	21											21		小野又右衛門挽立	
	金物・石・瓦など	鉄くき類	21.2											21.2	616.41	八丁かじ屋次郎□	
		地石（小屋門尺六、塀五六）	250	8										258		敷波	(250+8)上野村新左衛門
		塀棟石	45											45		敷波　上野村石屋利左衛門より買入	
		同控石	13											13		砂子坂高□□にて買	
		杉板戸（4本6.2尺3.6尺小屋の口）	40											40		福井神明町文右衛門より買入	
		塀屋根瓦	180.06											180.06		清王村瓦屋安九郎	
		同はりかね	9											9		福井鍋屋右衛門より買入	
		石灰（門たたき）18俵、12俵	18.7	11.4										30.1		三国□屋世話、小野平右衛門世話	
		はいすみ4升	1.5											1.5			
		しふ8升	4.8											4.8		福井まきつ屋喜兵衛	
		くちなし	3											3			
		にんしゅ	4											4		福井かと屋	
		すす5升	?											0		木下善兵衛より買	
		種油	6.75											6.75		佐野油屋儀兵衛より買	
	屋根材	加屋（屋根両はじき）150束	27											27	321.95		
		かべこうまい加屋25束	5											5		橋屋村与四郎より買	
		加屋49束	8.9											8.9		串野卯兵衛より買	
		藁1372束（200×3、50、120、50、120、193、70、145、24）	10	11	10	2.5	6	2.5	6	9.75	3.5	7.5	1.4	70.15		木下村庄左衛門、庄右衛門、次左衛門、善吉、善次郎、權七、小野多兵衛、弥右衛門、半右衛門、木下善兵衛、長兵衛より買	
		藁（1000束余）	50											50		持入	
		縄たま	1.5	2	1	1.5	1							7		小野吉郎右衛門、權兵衛、串野甚太夫、小幡平右衛門、多兵衛より買	
		縄　(9、7束)	4.5	3.5										8		佐野文蔵、小野半右衛門、	
		縄　(20束)	10											10		持入	
		麻木36束（5、6、3、2、5、3、12束）	1	0.5	0.4	1	0.5	4						7.4		串野彦兵衛、小野伝右衛門、五右衛門、文右衛門、彦右衛門、彦左衛門、中野善兵衛	
		麻木（25束）	5											5		持入	
		竹（5寸回り200、4寸回り200、3寸回り200本）	50	40	15									105		持戸にて剪る	
		古竹												0		数知れず	
		3尺5寸たけ2本	12.5											12.5		小幡弥右衛門より買	
		同ふみ板9尺（1寸厚）	6											6		小幡伝右太夫より買	
手続き関係		役人への手続きお礼など	40	50	14.8									104.8	104.8		
		手間賃等　小野庄屋	76.11											76.11	520.78		
		手間賃等　小野長百生	38.5											38.5			
		手間賃等　串野庄屋	96.7											96.7			
		手間賃等　串野長百生	3.2											3.2		文書では52.799	
		手間賃等　串野彦兵衛	29											29			
		手間賃等　小野□右衛門	3											3			
		宿代他	274.27											274.27			
総　計															3980.99		

買木材木渡方にあるもの、ほとんど金額増加　太字は金額割り増し

持山挽物にあるもの、太字は金額割り増し

が盛んな地域であったことがわかる。[13] 金物・石・壁材などでは、石材の金額が大きな割合を占めるが、これは手間込みの金額であるからなんとも言えない。次いで材料のみの塀瓦となる。

ところで大工の手間賃がなく、毛利家の持ち山の材木や毛利家が所有していた屋根葺き材が工事費の勘定に入れられ、所有あるいは購入された多くの木材金額が割り増しされて計上されている。一般的に工事費合計に毛利家所有の材木や屋根葺き材の費用を参入することはわかる。しかし、前述のように想定ではあるが、大工手間賃が工事費の約二三・二％と非常に大きな割合を占めるのに勘定に入れないことは不自然であり、また多くの木材の金額を割り増する理由も理解することができない。このことは長屋門の建設が福井藩の地方役所建物として建設されたことを意味し、その費用が藩から支出されたことを想定させる。事実、藩への長屋門再建願の許可に「同廿五日御評定之上願之通リ被仰付候段御配賦頂戴致　同廿六日致出町御禮相勤ル」とあり、工事費を賦課金によって調達する配賦によって建てられることが判明する。このため、大工手間は福井藩の直接の管理となり、人工のみの書上げとなったとみられる。

一方、毛利家持ち山の木材や所有の屋根葺き材の金額はどうであろうか。木材は樹種・大きさ・長さ・品質によって単価が異なるので、購入品と自前品の両方で同じ品物がみられる屋根葺き材の藁・縄・麻木を例にみる。藁では購入品が約〇・〇〇五一匁／束、自前品が〇・〇〇五匁／束、縄では購入品が約〇・五三匁／束、自前品が〇・五匁／束、麻木では購入品が〇・二〇六匁／束、自前品が〇・二匁／束と、自前品がやや安いがほぼ同じ単価で購入されていることがわかる。毛利家持ち山の木材は下書きと清帳いずれも大きさ・長さ・品位・金額の他に一丁あるいは一本当たりの単価が記入されるが、清帳にはその最後に「買」という字が新しく添えられている。この「買」の字の追加と屋根葺き材の購入金額を考えあわせると、毛利家持ち山の木材も市場単価に合わせて購入された金額で清帳に書き直されたことが類推される。このことも賦課金によって長屋門が建てられた裏付けとなる。

八、文書長屋門の大きさと仕様

「志願日記帳」の「家前長小屋門造建諸事覚」の項にある長屋門の大きさや仕様は次のように記される。「一家前長小屋門　但　長八間弐尺横二間　門通り弐間半　内　本戸口立八尺五寸　横八尺　戸四尺弐□　但ヒシ開クワンヌキメリ　小脇ク、リ両方開戸　但ヒシ開クワンヌキメリ　地石尺六　外と通り弐重内通り壱重　屋根裏四方セイカイ　立壱丈弐尺　一同両方袖塀　但　壱方長五ツ、　立テ七尺五寸ツ、　地石五六壱通　屋根ウテ木セイカイ　かわらふき　棟瓦石　控石壱方□□ツ、　右腰板双方板シタミ　黒腰」。

これから長屋門は桁行八間二尺梁間二間の大きさで、軒は四方が船枻造となり、総高さは一丈二尺であった。門中央に二間半の開口があり、その開口中央に幅八尺の両開きの扉とその両側に片開きの潜り戸がついていた。長屋門基礎は正面側が二重、内側が一重で尺六の石で築かれていた。この他に表4の材料の購入内訳から以下のことが推測することができる。屋根端に茅をつかった藁葺であった

こと、入母屋妻の破風上に麻木で装飾的な補強がされていたこと、屋根下地に竹を用いて縄で結い付けられていたこと、壁下地の小舞は茅をもちいていたこと、壁の仕上げは中塗り程度であったこと、そして木部ににんしゅ（弁柄？）・柿渋・煤・油などを混ぜて塗っていた可能性があったこと、長屋門の部屋の出入りに引違い板戸が四枚用いられていたことである。

一方、長屋門両側面には長さ五間高さ七・五尺の瓦葺塀が建てられた。塀は五六石の基礎で控え柱をもち、腕木で屋根を支え、棟に石を置き、壁を黒く塗った腰板が張られていた。

九、現長屋門にみられる痕跡

東西両物置の通路に面する幅二・九メートルの引違いの板戸およびその上部の差鴨居は材料が他の部材と比較して新しい。この開口部両端の欅柱には幅二十二ミリ高さ百十五ミリの三ヶの貫穴が物置側に寄せてあり、その上下に間渡し竹を止める竹釘痕がのこっている（図11・12）。さらに最上部の貫穴よりやや下に通路側へ寄せて幅三十一ミリ高さ百三〇ミリの埋木がのこる。差鴨居上には古い二本の杉柱が切断された状態でのこっている（図13）。また、西物置の板戸裏に「昭和三記念仕事　浄土寺七部博士作」と墨書がある（図14）。以上のことから、この開口部はもと土壁であったものを、昭和三年に柱を切断して差鴨居を入れ、引違い板戸を入れたことがわかる。さらに、通路側には背面外壁の腰壁と同じような高さに土壁仕上げの見切材が入れられていたことが想定され、想像の域ではあるが、見切材下には他の外壁の腰壁と同じような下見板が入れられていたことが考えられる。一方小屋組では、軒先の出桁を支える腕木に扠首穴の痕跡がみられる（図15）。この痕跡は跳ね出した腕木が架かる桁あるいは妻梁の位置にあり、丸く凹んでいる。また、既述のように跳ね出した腕木より上部の梁・小屋束・母屋・棟木・垂木・野地板の部材は新しく、後から入れられたことがわかる。このことから小屋組は扠首組から和小屋組や登梁に変更されたもので、以前は茅葺きであったことがわかる。

ところで、これらの不用な貫穴や仕口痕、さらに柱下の土台や小屋組の変更は長屋門の移築をうかがわせる痕跡とすることもできる。しかし、前述の東西物置の通路側にある開口部両端の柱にみられる貫穴や仕口痕は、昭和三年の改造であり、その柱にのこる土壁の間渡竹の竹釘痕は一回しか確認されない。このことから当初の柱に取り付く壁は、昭和三年に取り払われた壁しかなかったことになり、移築の可能性はほぼ否定されると考えてよい。また、柱下の土台は建物の地盤沈下と腐りによるものとみられ、すべての柱にみられるものではない。しかし、現状では物置内の壁が合板張りとなり、建物を解体した訳でもなく、すべてが判明しているわけではないので、移築の可能性が低いにとどまる。

十、現長屋門と文書長屋門の比較

現長屋門の大きさは既述のように桁行十五・六〇メートル梁間三・八五メートルである。「志願日記帳」の長屋門は「長八間弐尺横二間」とあるから現長屋門の梁間二間から得られる一間を一・九二五メートルとし、桁

図14　西物置引違い板戸の墨書

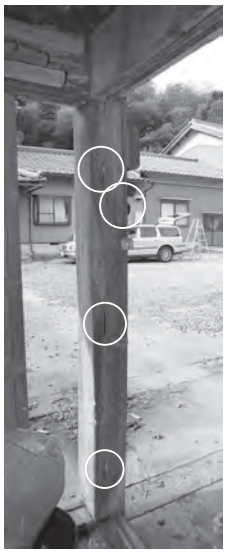

図12　西物置北東隅柱の土壁の貫仕口痕等

図11　東物置北西隅柱の土壁の貫仕口痕等

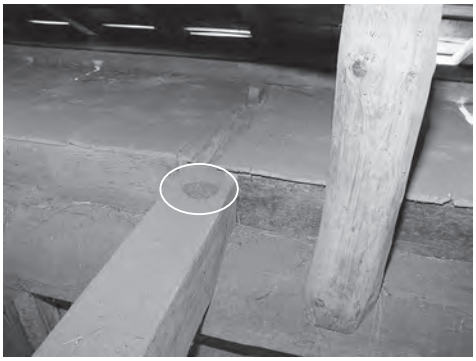

図15　腕木上面の扠首穴痕

図13　西物置の通路側の切断柱

行幅をみると十六・〇〇メートルとなり、文書の長屋門桁行が四十〇センチ大きくなる。同様に通路幅では「志願日記帳」が「弐間半」で四・八一メートル、現長屋門の通路幅は四・五七メートルで、二十四センチ文書の長屋門が大きくなる。しかし、越前地方でよくみられる一間の柱真々を六尺二寸（一八七八ミリ）と仮定すると、桁行十五・六三メートル・梁間三・七六メートル・通路幅四・七〇メートルとなり、桁行差三センチ、梁間差九センチ、通路幅差十三センチの違いとなる。長屋門の欅隅柱は杉柱より三～四センチ大きく、片寄せに配置されていること、またすべてが文書の寸法通りに施工されているとは限らないことを考慮すると、ほぼ同じと考えてよいと思われる。主扉の開口は文書が縦八尺五寸（二五七六ミリ）横八尺（二四二四ミリ）で、現長屋門が縦二五六〇ミリ・横二四〇七ミリとなり、ほぼ同じである。主扉の大きさは幅四尺（一二一二ミリ）が一一〇七ミリとなり、扉の開き方、小脇の潜り戸も文書とほぼ一致するとみてよい。なお、扉や吊り金物は文書には記されていないので、後で取り付けられ

表５　「志願日記帳」の材木明細寸法と実測寸法の比較

文書長小屋門							現長屋門						
部位	文書部材名	断面(寸)	長さ(尺)	本数	品位	樹種	部材名	断面(mm)	断面(寸)	長さ(尺)	本数		樹種
柱	*柱*	*6×6*	*12*	*8*	*上角*	*槙*	*四隅柱*	*169×171*	*5.63×5.64*	*10.6*	*8*	*化粧*	*欅*
	柱	*6×8*	*9*	*4*	*上角*	*槙*	*鏡柱*	*244×176*	*8×5.8*	*7.87*	*2*	*化粧*	*欅*
							門両端柱	*192×?*	*6.34×?*	*8.8*	*2*	*化粧*	*欅*
		6×6	*12*	*2*	*上角*	*槙*	*楣*	*130×140*	*4.5×4.7*	*7.3*	*1*	*化粧*	*欅*
							蹴放し痕	*?*		*7.3*	*1*	*化粧*	*欅*
							脇門楣	*143×170?*	*4.7×5.6?*	*2.85*	*2*	*化粧*	*欅*
		7×12	*16*	*1*	*上角*	*槙*	*冠木*	*349×?*	*11.52×?*	*14.67*	*1*	*化粧*	*欅*
		6×8	4.5	2		槙							
							脇蹴放し	60×118	2×4	2.85	2	化粧	欅
							脇門上板					化粧	欅
柱				*28*		*杉*	*内部柱*	*120～130角*			*22+α*		*杉*
		6.5×13	2.5間	2	上角	松	梁(前)	281×180	9.4×6	16.5	1	化粧	松
							梁(後)	282×169	9.4×5.7	15.3	1	化粧	松
		4×6.5	*6*	*18*	*上角*	*松*	*腕木*	*172×110*	*5.64×3.7*	*5.6*	*18*	*化粧*	*松*
		1.5×4	10	16	上角	松	壁下見見切	105×40	3.5×1.4	11	2	化粧	松
							壁下見見切	124×40	4.2×1.4	18.5	2	化粧	松
							壁下見見切	124×40	4.2×1.4	3	2	化粧	松
							壁下見見切	105×40	3.5×1.4	13	2	化粧	松
							通路側貫穴痕	130×31	4.3×1.1	10	2	化粧	
		1.2×7.5	*6間*	*4*	*上角*	*松*	*付桁*	*24×196*	*0.8×6.6*	*延132(22間)*	*1*	*化粧*	*松*
		1.2×7.5	*5.5*	*22*	*上角*	*松*							
		1×1.5	10.5	30	上角	松	垂木下見切	30×42?	1×1.5?	142	1	化粧	松
							鴨居梁	197×140	6.6×4.7	6.7	2	化粧	松
		0.7×3.5	14	14		松	壁貫	100×?	3.3×?				
		0.7×3.5	12.5	20		松							
		0.7×3.5	2間	34		松							
		0.7×3.5	2間	20		松							
							壁貫穴?	115×22	3.8×.75				
		4×8	2間	1	上角	松							
		3×6	*13*	*8*		*松*	*2階床梁*	*180×85*	*6×3*	*12.8*	*8*		*松*
	5尺たるき			50		松	2階根太	47×49	1.6×1.6	18.3	10		松
	5尺たるき			8		松	2階根太	47×49	1.6×1.6	11	8		松
							2階床梁	160×220	5.4×7.4	18.3	2		松
	1丈上たるき			*4*		*松*	*通路上根太*	*52×70*	*1.7×2.4*	*10*	*4*	*化粧*	*松*
	1丈こまい			5		松	天井棹	35×24	1.2×0.8			化粧	松
		3×3	7.5	12		栗	西土間床根太?			7.5	10		
		4×4	7.5	4		栗	東土間床根太?				10		
破風板	門両はふ						破風板						
		6×6	*13.5*	*2*	*上角*	*松*	*妻梁*	*150×155*	*5.1×5.1*	*13.4*	*2*	*化粧*	*松*
		6×6	*15*	*4*	*上角*	*松*	*桁*	*180×155?*	*6×5.1*	*52*	*2*	*化粧*	*松*
		6×6	*13*	*2*		*松*							
		6×6	*14*	*2*		*松*							
		4×6	18	4	上角	松	腕木+梁	172×110	5.64×3.7	18	2	化粧	松
							腕木	172×110	5.64×3.7	5.6	4	化粧	松
		4×6	*8*	*4*	*上角*	*松*	*隅木*	*172×110*	*5.64×3.7*	*8*	*4*	*化粧*	*松*
		4×5	16	3	上角	松							
		3×5	*16*	*2*	*上角*	*松*	*出桁*	*81×120*	*2.7×4*	*150*	*1*	*化粧*	*松*
		3×5	*11*	*8*		*松*							
		3×5	*6*	*4*		*松*							
		2.5×3	9.5	16		松							
		3.5×3.5	9.5	8		松							
		□×7	15.5	5	上角	松	桟梁	111×175	4×6	13.1	5	化粧	松
		末口4.5寸丸太	*2.5間*	*6*		*松*	*敷梁丸太*			*17*	*1*	*野物*	*松*
							梁丸太			*17*	*1*	*野物*	*松*
							梁丸太	*末口4寸*		*15.6*	*4*	*野物*	*松*
		末口4.5寸丸太	5間	2		松	サス棟?			9間			
		末口3.5寸丸太	13	24		松	サス丸太穴	?		24～26			
	下ミさん挽物			1		松	下見桟	50×30	1.7×1	5	18	化粧	松
							下見桟	47×27	1.7×1	6	33	化粧	松
		6分6枚はり		25間		松板							
		8分		2間	上掾	松板							
		6分		2間	上板	松板	セガイ天井板?	15	6分				松
		6分		1間		松板							
		6分ふしなし		3間		松板							
							2階床板	12		5坪	2		松
		4分板7枚はり		*14間*		*杉板*	*下見板7枚*	*12*	*4分*	*14間*			*杉*
		4分地板		4間		杉板							
		4分地板		7.5間		杉板							
建具	*杉板戸*	*6.2×3.6*		*4*			*杉板戸*	*6.2×3.4*			*4*		*杉*
							主扉	1077×2371×89			2		欅
							脇扉	878×1426×71			2		欅
							土台	76×170	2.6×5.6	18.2	1		檜?
							土台	36×170	1.2×5.6	18.2	1		檜?
							土台	64×194	2.1×6.5	3.9	2		檜?

※ 網掛けは部材間の関係が想定されるもの(斜字体はほぼ確定できるもの)

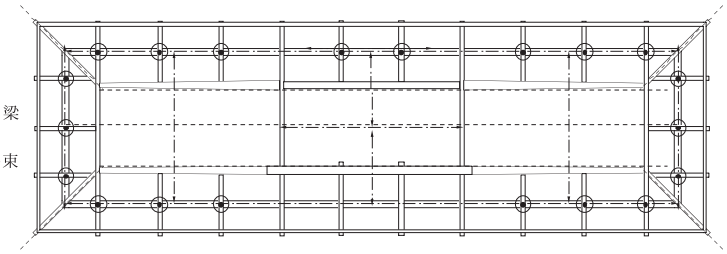

図16　小屋伏図

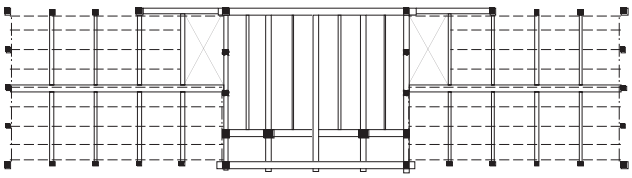

図17　二階床伏図

た可能性がある。

基礎石も正面側に二段積まれて高くなり、側面および背面側は低く一段のまで、これも一致する。屋根の軒先も四方船枻造で一致する。なお、屋根は既述のように茅葺きから入母屋造り桟瓦葺きに変更されて、文書の総高さとは一致しない。しかし、文書の総高さ一丈二尺（三六三六ミリ）は棟高さを示すものではなく、桁高を示すものと考えると、現桁高が約三・五四メートルで、柱足元が切断されていることを考えると、ほぼ同程度の高さとなる。壁の小舞下地は竹と茅が使用されて、茅が使用されたことと一致する。建具では文書にみられる四枚の板戸が門背面の左右にあり、文書の記述寸法と一致する。文書では長屋門の左右に腕木と出桁をもつ瓦葺きの塀がみえるが、現在の塀は柱上部に瓦を置く簡単な塀で一致しない。しかし、現長屋門の南西隅柱にのこる痕跡から、現状より高い塀が建てられていたことが判明するが、腕木のある塀であたかどうかはわからない。

以上のように「志願日記帳」の家前長小屋門が、現長屋門に大きさや平面がほぼ一致することが判明した。しかし、毛利家の言い伝えによれば、この門は移築された建物であると言われており、門などの様式はほぼ形や大きさが決まっているので偶然の一致も考えられる。そこでさらに両長屋門を部材寸法・長さ・材種から検討する。「志願日記帳」の長屋門部材寸法を木材明細から拾い出し、現長屋門の部材寸法は実測寸法によった。明細の木材は切り刻んだり削ったりして使用するので、古文書の部材明細より実測寸法は一般に小さくなる。また、木材明細には部材名がほとんど記入されていないので、使用場所が不明なものが多く、部材寸法や品位から想定するしかない。このことを念頭に文書長屋門と現長屋門の部材関係を比較したものが表5で、現長屋門の構造部材の位置や長さを示したものが図16・17である。これをみて明らかなように現長屋門にみられる多くの部材の寸法や数量が、「志願日記帳」の木材寸法と数量にほぼ一致していることが確かめられる。このこ

とはさらに文書にみられる木材で現長屋門がほぼ建てられるということで、文化九年の文書長屋門は新築であることの証ともなる。

一方、樹種については槙と記される四隅柱・鏡柱・門両端柱・冠木・門脇柱が欅材であることを除き一致している。この樹種の相違がなぜみられるのかは明らかではないが、「欅」を用いている部材がすべて「槙」の字となっており、「槙」と「欅」に何らかの関係があることは間違いなく、[14]今後の解明によることとする。なお、材木明細には欅でできた主扉か脇扉の部材とみられる槙の材木がみられない。また、表4の工事費内訳にも購入品の中に主扉・脇扉の記述はなく、さらに扉金物もみられない。このことから建設当初には扉が備わっていなかったと考えられる。以上部材寸法さらに部材数からも毛利家の現長屋門は移築されたものではなく、文化九年に現地で新築されたものであるといえる。

十一、まとめ

まず毛利家長屋門の普請文書である「見舞留帳」・「志願日記帳」の調査から、長屋門の普請にともなう見舞人や見舞品、普請経過、職人と出身地、工事費、大きさと仕様を明らかにした。その後、現長屋門の実測をおこない、詳細な部材寸法と長さ・樹種を調査し、合わせて痕跡調査から建設当初の長屋門を明らかにした。そして現長屋門の部材寸法と長さ・樹種を、「志願日記帳」の記載内容と比較し、ほぼ一致することを確認した。以上から現毛利家長屋門は移築されたものではなく、現地に大庄屋の長屋門として建てられたものであることを明らかにした。

最後に、本稿の執筆に際して実測調査には毛利洋子さん、毛利長仁家文書の閲覧には福井市文化課、福井県文書館にご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

註

(1)「毛利家長屋門」福井市文化財指定理由書

(2)『福井市の歴史がみえる建造物』若越建築文化研究所編　福井市　平成十五年

(3) 福井県文書館　資料群番号A0032毛利長仁家文書の目録では文書番号00027表題「志願日記帳（家前長小屋門造建ニ付）」、文書番号00029表題「門普請見舞留帳」とあるが、資料の表題をそのまま記す。

(4)『角川日本地名大辞典18福井県』角川書店　一九八九年

(5) 福井県文書館　毛利長仁家文書目録による。

(6) 福井県文書館　毛利長仁家文書の目録文書番号00054表題「支配下村々庄屋長百姓判鑑帳」

(7)「志願日記帳」によれば、串野村・小野村の庄屋・長百姓が長屋門建設のための各種手続きや見分などに参加しており、串野村は毛利家の支配下であったことも十分考えられる。

(8)『旧蓑輪家住宅移築復原工事報告書』福井市教育委員会　平成二十一年　同報告書中の普請文書。『福井県指定文化財（建造物）木下家住宅』勝山市教育委員会　平成十九年　同報告書中の普請文書。

(9) 前掲（4）

(10) 拙稿「松平主馬家の大名広路屋敷と安永普請」福井工業大学研究紀要第28号　一九九八年

一方、近くの石新保村の願念寺本堂は伊井大工、石橋村の浄光寺本堂は永平寺大工が建てている。このことから寺社仏閣建築を別にすると、小野村周囲では中野大工は有名であったとみられる。

(11) 前掲（4）

(12) 前掲（8）の『旧蓑輪家住宅移築復原工事報告書』の史料「巳年普請入用覚帳」（文化六年）には大工工数五人半で13匁七分五厘とあり、二・五匁／

人日であることがわかる。また、『福井県指定文化財（建造物）木下家住宅』によれば、幕府直轄領の大野郡伊知地村（現勝山市）にある木下家住宅の普請記録では、天保六年時の大工手間が二匁／人日となるが、木挽は一・五匁／人日と毛利家の一・六～一・八匁／人日と比較して安くなっている。このことから大工手間賃は二匁／人日より高い二・五匁／人日程度と考えられる。

（13）拙稿「願念寺本堂について　近世社寺建築の実例」日本建築学会北陸支部研究報告集五十一号二〇〇八年、「浄光寺本堂について　近世社寺建築の実例（二）」日本建築学会北陸支部研究報告集五十四号　二〇一一年

（14）拙稿「本堂用材のアスナロについて　瑞源寺の研究」日本建築学会北陸支部研究報告集五十二号二〇〇九年によれば、福井藩の留木は時代よって多少異なり、槙・松・杉・桐・槻あるいは樫（欅）で、槙が檜あるいはアスナロを指していたことも考えられる。このことから「志願日記帳」の槙は檜あるいはアスナロと考えられるが、現長屋門は欅材であり、槙の代用として欅を使用したことも考えられる。今後の研究を待ちたい。